矢高原・八幡原遺跡

——発掘調査報告書——

1983

長野県鼎町教育委員会

序　　言

鼎町都市計画公園事業として、矢高中央公園の建設が進められております。昭和56年度にはコミュニティー広場が完成し、続いて本年度は『こどもの広場』の建設が行なわれることになりました。

この地籍は矢高原遺跡の一角で重要な文化財の包蔵地（縄文、弥生）として指定されており、更に南側の猿小場遺跡は昭和53・54年度において飯田市教育委員会が長姫高等学校の建設に先立ち遺跡の発掘調査が実施されて、住居跡や遺物が多数出土し記録保存されました。

矢高原・猿小場の地帯は重要な包蔵地だけに今回「こどもの広場」の造成工事に先立って埋蔵文化財保護の立場から、当教育委員会が遺跡の発掘調査を行なったものであります。

今回の調査は特別な住居跡や遺物は発掘されなかったが、河川跡が発見され、土石流氾濫の痕を残しており急流路を示す砂斜層がみられさことは、猿小場遺跡調査とあわせて矢高原一帯の概況が解明されることになりました。また続いて鼎町墓地霊園の建設工事が計画されましたので、その予定地籍は八幡原遺跡の包蔵地一帯に接するためグリット方式、トレンチ方式による徹底した発掘を行ないましたが特別の遺跡・遺物もなく終わることとなりました。

発掘調査にあたっては調査団長、遮那藤麻呂先生、調査員遮那真周先生が担当されましたが、短期間のうちに綿密周到な調査と報告書作成に格別のご尽力をくだされました先生方を始め作業に従事された各位に衷心より厚くお礼を申し上げます。

昭和58年３月

鼎町教育委員会

教育長　関　口　安　穂

凡　　例

1. 本書は鼎町が、都市計画事業として矢高原中央公園・八幡原墓地霊園建設に伴い、用地内の埋蔵文化財発掘調査を、鼎町教育委員会が実施した二遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査の時期は、昭和57年５月と同年11月と二回に亘って行なわれた。

3. 本文執筆は遮那（真）が、遺物の実測・拓影は遮那（藤）が担当した。

4. 現地調査においては、鼎町教育委員会事務局の方々の協力を得た。

5. 本調査で出土した遺物類は、鼎町教育委員会で管理・保存している。実測図は遮那が保管している。

6. 地質観察については、飯田市緑ケ丘中学校・松島信幸教諭の助言を得た。記して謝意を表する。

7. 本報告書の編集は遮那が担当した。

目　　次

序　　言
凡　　例

第Ⅰ章　矢高原遺跡……5
　第1節　発掘までの経過……5
　　発掘調査日誌（矢高原遺跡）……5
　第2節　環　　境……6
　　1.　位置と地形……6
　　2.　歴史的環境……6
　　第1表　矢高原付近の遺跡……8
　第3節　調査の経過……8
　　第2表　台地の層序……9
　　第3表　出土渡来銭鋳造年代別一覧……10
　　第4表　長野県内古銭出土別一覧表……11
　　1.　出土遺物……12
第Ⅱ章　八幡原遺跡……23
　第1節　発掘調査の経過……23
　　調査日誌（八幡原遺跡）……23
　　1.　遺　　物……24
　　2.　考　　察……26
　　鼎町矢高原及び八幡原遺跡発掘調査組織……27
　　おわりに……28

挿　図　目　次

第１図　矢高原・八幡原遺跡位置及び地形図……7
第２図　矢高原遺跡東側土層図……9
第３図　矢高原遺跡出土古銭拓影……13
第４図　矢高原遺跡出土古銭拓影……14
第５図　矢高原遺跡出土古銭拓影……15
第６図　矢高原遺跡出土古銭拓影……16
第７図　矢高原遺跡出土古銭拓影……17
第８図　矢高原遺跡出土古銭拓影……18
第９図　矢高原遺跡出土古銭拓影……19
第10図　矢高原遺跡出土古銭拓影……20
第11図　矢高原遺跡出土古銭・土製品・鉄製品・土器……21
第12図　矢高原遺跡出土土器、石器実測図……22
第13図　八幡原遺跡出土石器実測図……25

第Ⅰ章　矢高原遺跡

第１節　発掘までの経過

広範な矢高原埋蔵文化財包蔵地の一部、矢高神社東側の土地が、町民の要望に応え、緑の広場として矢高中央公園建設の計画が決まったのは、昭和47年であった。

その造成は年次計画によって進められることとなった。先づ神社に接した場所に、テニスコート（約4,000 ㎡。昭和53年開設）と駐車場（約1,000 ㎡。昭和53年開設）が、さらにその東にコミュニティーの広場（約7,500 ㎡。昭和56年開設）と逐次造成された。しかしこの地域はいずれも土盛整地を行なうのみで、特別施設がなされない故をもって、発掘調査の対象にはならなかった。造成に先立っては慎重を期して、町教育委員会と立会で地表観察、ボーリングなど表面調査を実施した。

次いで昭和57年度事業として、この地域の南側に建設する子供の広場（約1,800 ㎡）は遺物包含地で、飯田長姫高校建設予定地として既に飯田市教育委員会によって、昭和53年より１次・２次の発掘調査が行なわれた猿小場遺跡に続く地域でもある。よって現地は予じめ入念に地表観察を行なった。昭和56年７月、県文化課の現地視察もあって、調査について具体的な打合わせを行ない、翌57年工事着工前に発掘調査を実施することを決めた。

発掘調査日誌（矢高原遺跡）

月　日	曜日	天候	日　　誌
5　20	木	雨	器材置場設定（教育委員会）作業員若干名、作業降雨で中止。
〃　21	金	晴	器材点検整備、グリット設定　上物排除作業、グリット調査。　業　（10名）
〃　22	土	〃	グリット調査、抜根作業、ブル導入打合わせ、グリットＨ―23で渡来銭出土、鼎中生徒若干名協力、作業員（９名）
〃　24	月	〃	グリット調査、ブル一部表土除去作業、東側断面層序調査、土石流確認、グリット一中世陶器片・黒耀石片
〃　25	火	〃	東側断面掘下げ、東側北隅弥生土器片・焼土検出、同所拡張住居跡追求　断面調査溝に平行トレンチ設定、間隔15m―30m×２　土石流調査、松島信幸氏地質調査。作業員（9.5名）
〃　26	水	〃	東西基準線沿いにトレンチ(A)設定（15m×２m）、中央部より石斧、弥生土器片地点追求。事務局と作業打切り打合わせ、グリット調査、作業員（10名）
〃　27	木	〃	東西(A)トレンチさらに西へ８m延長、灰釉陶器片・土師器破片出土、午前中にて作業打切り、器材置場撤収、用具点検返却、報告書作成打合わせ、現地打上式、解散（矢高神社境内）作業員（10名）

第2節　環　　境

1．位置と地形

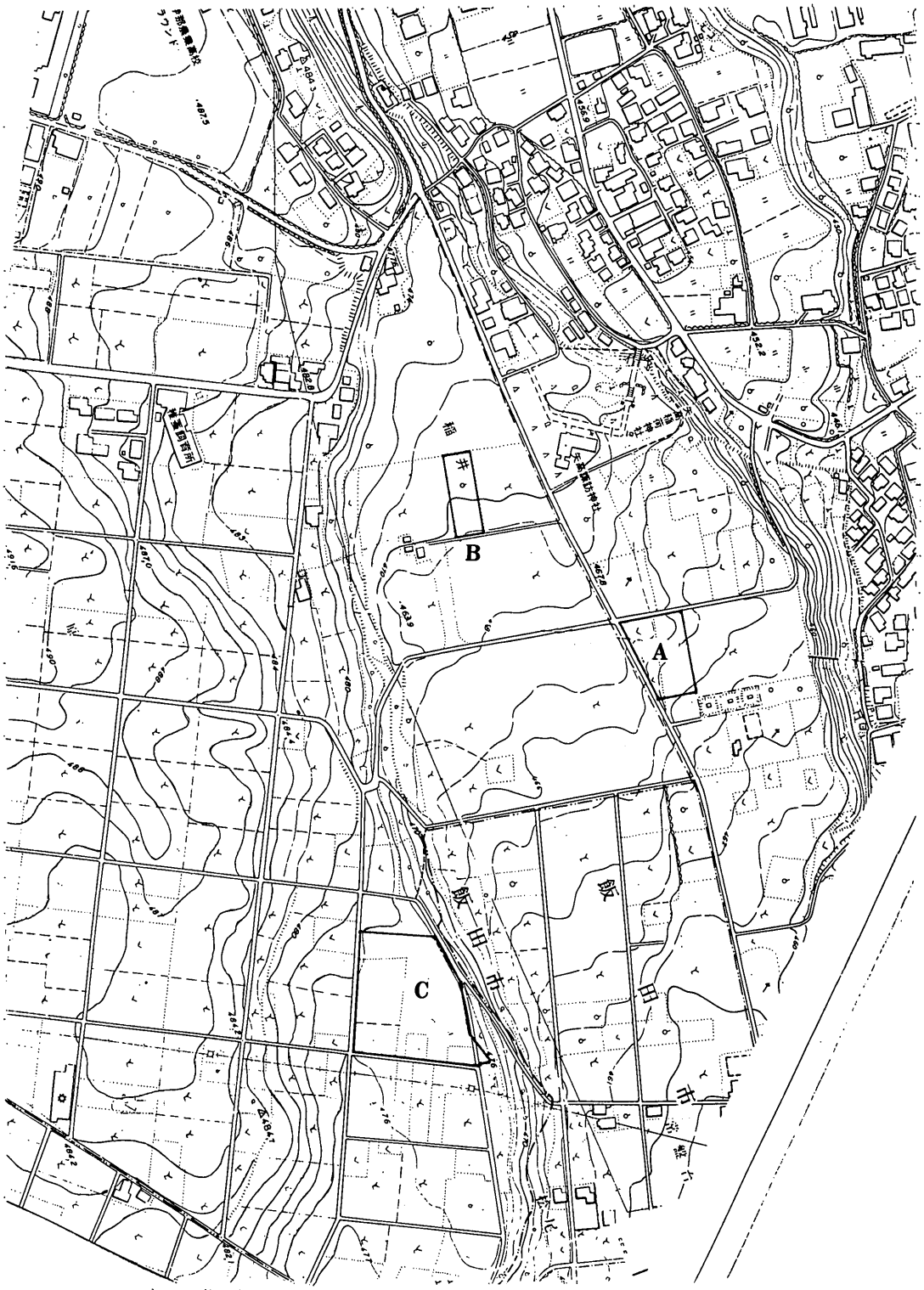
遺跡は、長野県下伊那郡鼎町大字鼎 1,420～ 1,427 番地に所在する。数理的には東径 135度30分北緯35度30分、標高 468メートルで、伊那谷段丘の編年によると第 6 位の段丘上にある。遺跡のすぐ西は、矢高諏訪神社に接し、さらに西よりの一段高い段丘上には庚申塚、別称遠矚台と呼ばれる古墳の森がある。東南側は飯田長姫高校のある八幡原北平地籍に続き、県住常盤台団地を経て八幡地籍に下る。団地の南には八幡の森が長く続く。北側は段丘崖頭で、町の中心部が瞰下され、松川を狭さんで飯田台地の先端（長姫城）に対し、その東方は天竜川の氾濫原が望まれる。

木曽山脈に属する前山は、鼎町付近では風越山・笠松山・鳩打峠・高鳥屋山などが南北に連なる。水源をこれらの山中にもつ諸河川は花崗岩質の土砂を運搬堆積した。洪積世の時代、松川の大規模の氾濫により、天竜川の堆積と相まって、広に地域にわたる扇状地が形成されたが、鼎町全域も、この堆積物によって覆われた。矢高原段丘も、この扇状地がその後、松川の側面浸食によって造られたもので、東西の延長凡そ 1,000メートル、東端は八幡地籍へ段丘崖でおちる。南北は凡そ 200メートルの幅で展開され、北側は比高10～20メートルの段丘崖で低位面におち、松川氾濫原に延びる。矢高神社西側はその面を狭ばめながら下位段丘の上山面に連続しながら終わる。遺跡の南側は 1 段高い下伊那農業高校、飯田女子短大のある八幡原面と比高20メートル前後の段丘崖が東西に延びて常盤台団地南あたりで尽きる。

八幡原面は南西に展開して、さらに高位の名古熊神社、運松寺、一色神社のある段丘面に及び、南に延びて毛賀沢谷で尽き、西方は飯田市上殿岡、北方方面に続く。なお遺跡の微地形は、常盤台団地に向かう道路（町道72号線）添いに微高の区域が北東に緩い勾配を示し、石垣積の畑が若干ある外は平担で段丘崖に延びる。

2．歴史的環境

遺跡周辺には、縄文時代から歴史時代にわたる遺跡及び包蔵地の分布が多い。詳細は長野県史刊行会、昭和36年発行の「長野県史考古資料編―遺跡地名表」を参照されたい。いまここに極く間近かにあるものをあげると、第 1 表のようである。これらのうち発掘調査されたものは、柳添(代田)遺跡の一部と猿小場遺跡のみである。柳添道路は、昭和44年町道 7 号線拡幅工事の際調査し、伴信氏が「信濃考古27」及び雑誌「信濃」(3)21― 2 （昭和44年）に「下伊那郡代田遺跡」として、それぞれ報告している。猿小場遺跡は、飯田市教育委員会より、昭和53年に発掘調査が行なわれ「猿小



第１図　矢高原・八幡原遺跡位置及び地形図

第1表 矢高原付近の遺跡

番号	所在地	遺跡名	時期					備考
			縄文	弥生	古墳	平安	中世	
1	上山	乃木坂遺跡		後期 中島式土器				
2	中平	黒河内 〃			土師器			
3	〃	役場裏 〃				須恵器		
4	〃	柳添 〃 (代田)	中期 勝坂式 打石斧	後期 中島式土器	土師器	土師器		発掘 (昭44)
5	稲井	下伊那 農学校 〃	打石斧 磨石斧		土師器			
6	名古熊 八幡原	八幡原 〃	中期土器 打石斧 磨石斧					
7	稲井 物見塚	物見塚古墳			土師器			
8	名古熊	猿小場遺跡	中期 石鏃 打石斧	後期 石器 土器	土師器 須恵器	土師器 須恵器 灰釉陶器	飾金具類	発掘 (昭54)
9	下山	鞍音古墳						
10	上山	庚申塚 (遠矚台)						伝承 古墳

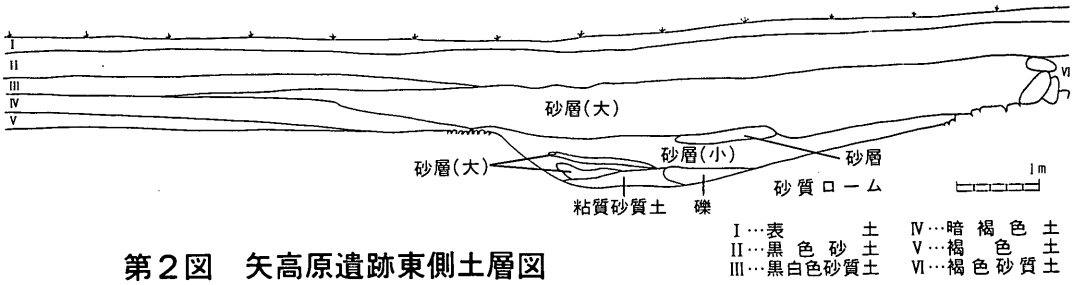
場遺跡」の報告書が出されている。松川氾濫地帯では、役場遺跡で古墳期の遺物が発見され、やや東の国鉄飯田線に沿う黒河内遺跡では、古墳期の完形土器（土師器）２点が発見されているが、その他はいづれも地表採集のものである。本遺跡から北約200メートルの下位段丘面でかつて井戸掘作業中、地表下２メートルの砂礫層中より須恵器破片が多く発見され、古墳期の集落址を思わせた。なお遺跡の東方段丘の先端には、前方後円墳の御射山獅子塚がある。常盤台団地の上にある物見塚(大塚)その線上の北にある庚申塚は、かって松尾城小笠原氏が、飯田城坂西氏の見張りの場所とされたことで、物見とか遠矚台と呼ばれているようである。鼎町の各段丘崖頭には古墳の分布が一様に見られる。

矢高の地名は古く、矢高明神由来記にも見え、この段丘面は総体矢高原と呼ばれていたことが察せられる。近年宅地造成・学校・工場・農村の近代化等々一連の開発工事が進められ、緑の地帯が失われていくことは如何にも惜しい。

第３節　調査の経過

調査の実際は、昭和57年５月20日から同月29日までの10日間とし、作業員10名を公募して実施した。調査総面積1,800平方メートル、遺跡の上物は桑株を若干除去する程度で、調査の支障にはな

らなかった。調査方法は東側町道71号線に沿って南北に、北側はコミュニティー広場の南の溝に沿って東西にそれぞれ基準線を定め、調査区全体２ｍ×２ｍに分割しこれを一単位として調査に着手した。



第２図　矢高原遺跡東側土層図

第2表 台地の層序

深　度	土　　質	層　序
20～25cm	表　土	第１層
30～	黒色土層（場所で褐色砂質土）	第２層
15～22cm	黒白色砂質土	第３層
22～	暗茶褐色土	第４層
10～20cm	褐色土	第５層
	砂質ローム	第６層

先づグリット調査でＡ－８、Ｃ－８、Ｅ－８で深さ30～40センチで黒色土・砂質土と混じって拳大の小石、大小の礫、大きなものは１メートル以上に及ぶものの堆積が認められ、他のグリットからも同様の堆積が見られた。そこでこの疑問を解くため、南北の基準線に沿って断面調査を行ない、土層の堆積状態を調べて見た。特に中央部の層序は、黒色土層に続いて大粒な砂質層が深く落ち込み、その下部は礫が混入してローム層に達している。落ち込みの両側は黒色土、砂礫を混入し大きな石の堆石が認められ、ことに南側のそれは幅広く、連続して西へ延びているので洪水による強い土石流によって押し流されたものと察せられた。この落ち込みの南寄りの部分は粗い砂土が若干認められ、さらにその下部には小粒な砂質土が斜層理を示していかにも流れが急で、長年川の流路であったことが想像された。

土石流は、下層の礫を掘り起して流れ、粘土質砂土の上に乗っている。これは遠距離から流れたものでなく局地的なものと推定された。しかしその時代を決定する資料はここでは得られなかった。

コミュニティー広場に接した低い区域はブルトーザーで表土を除去しながら住居跡の確認を求めたがそれはなく、大石の埋没が断面調査の場合のものに連続するかに思われた。よってそれに平行して試掘溝を入れて調べると、土石流は前と同様ほぼ等間隔で、中間に流路の痕跡を狭さみ、さらにコミュニティー広場の方向に延びることが予測された。このように各所で大石埋没と礫層が検出され、ローム層上部に達することが判明した。しかしこの場合にも土石流の押出し時期を把握する資料は得られなかった。

土石流調査と平行して、南北基準線の基点北隅で、黒色土の落ち込みを調べたが、地表下約1.3メートルで弥生後期の土器片と焼土若干が認められた程度で住居跡確認はできなかった。またグリ

ットW－8で地表下70センチの新しい砂層で、寛永通宝1枚と中国渡来銭78枚が、中央の窄（中央にあけた方形の穴）に藁状繊維を通して一括したものが、緑青の付着で四ツのブロックに切られて発見された。グリットを拡大して精査したが、故意に埋納されたものでないことが判明した。渡来銭についての詳細は第3表を参照たれたいが簡単にそれにふれると、鋳造年代の最も古いものは、唐代の開元通宝で以下南宋の皇宋元宝まで約25種余りのものである。

第3表 出土渡来銭鋳造年代別一覧表

銭名	鋳造年（西暦）	中国の時代	日本の時代		枚数	備考
			時代	天皇名		
1.開元通宝	621	唐	飛鳥	推古	4	
2.乾元重宝	758	〃	奈良	孝謙	1	
3.太平通宝	976～983	北宋	平安	円融	1	
4.淳化元宝	991	〃	〃	一条	1	
5.至道元宝	995～997	〃	〃	〃	1	
6.景徳元宝	1004～1007	〃	〃	〃	2	
7.祥符元宝	1008	〃	〃	〃	3	
8.天禧通宝	1017～1021	〃	〃	後一条	1	
9.天聖元宝	1023	〃	〃	〃	5	
10.明道元宝	1032	〃	〃	〃	2	
11.景祐元宝	1034	〃	〃	〃	4	
12.皇宋通宝	1039	〃	〃	後朱雀	11	
13.嘉祐元宝	1056～1063	〃	〃	後冷泉	1	
14.嘉祐通宝	〃	〃	〃	〃	1	
15.治平元宝	1064～1067	〃	〃	〃	1	
16.熙寧元宝	1068	〃	〃	後三条	6	
17.元豊通宝	1078	〃	〃	白河	3	
18.元祐通宝	1093	〃	〃	堀河	6	
19.紹聖元宝	1094～1097	〃	〃	〃	5	
20.元符通宝	1098～1100	〃	〃	〃	3	
21.聖宋元宝	1101	〃	〃	〃	5	
22.政和通宝	1111	〃	〃	鳥羽	8	
23.正隆元宝	1157	南宋	〃	後白河	1	
24.淳熙元宝	1174	〃	〃	高倉	4	
25.嘉泰通宝	1201	〃	鎌倉	土御門	1	
26.皇宋元宝	1253	〃	〃	後深草	1	
27.不明銭					14	
28.寛永通宝	1624～1643		江戸	後水尾.明正	1	
合計					97	

第4表　長野県内古銭出土種別一覧表

出土地＼銭貨名	五銖	開元通宝	乾元重宝	大暦元宝	開通元宝	万年通宝	光天通宝	通正元宝	天漢元宝	光天元宝	乾徳元宝	漢元通宝	周元通宝	唐国通宝	宋元通宝	太平通宝	天福鎮宝	淳化元宝	至道元宝	咸平元宝	景徳元宝	祥符元宝	祥符通宝	天禧元宝	天禧通宝	天聖元宝	明道元宝	景祐元宝	皇宋通宝	至和元宝	至和通宝	嘉祐元宝	嘉祐通宝	治平元宝	治平通宝	熙寧元宝	熙寧通宝	大康元宝	元豊通宝	元祐通宝	紹聖元宝	紹聖通宝	海東通宝	東国通宝	元符通宝	乾統元宝	聖宋元宝	崇寧通宝	大観通宝	政和通宝	宣和通宝	建炎通宝	紹興通宝	正隆元宝	大定通宝	淳熙元宝	淳熙通宝	紹熙元宝	慶元通宝	嘉泰通宝	開禧通宝	嘉定通宝	大宋元宝	大宋通宝	紹定通宝	端平元宝	嘉熙通宝	淳祐元宝	皇宋元宝	開慶通宝	景定元宝	咸淳元宝	大中通宝	洪武通宝	永楽通宝	朝鮮通宝	宣徳通宝	紹平通宝	大和通宝	延寧通宝	寛永通宝	至大通宝	銭名不詳	洪順通宝
飯田市三穂伊豆木夜明山北麓																																																																																				
飯田市伊賀良北方字御倉やしき																																																																																				
飯田市箱川箱川神社境内				1			1				1			14	4	21		15	68	42	56	79	45		85	154	13	50	389	44	13	39	75	56	8	310		1	367	279	142	1			42		121		58	126	15	3	2	3		15	3		5	1	2	15			4	1	2	3			4	5										1		
飯田市上久堅7733																																																																																	2856		4980	
阿南町大下条早稲田神社裏	2	1043	35			1						2	1	2	32	109	1	86	161	125	224	352			216	475	43	153	1606	139		446		133		18	53	1	1853	975	515		1		230		394		120	490	40	1	2	9		61		17	18	8	5	40	1		14	1	2	8		1	12	2										2		
高遠町東高遠浅間矢場	○	○	○				○		○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○		○	○		○		○	○	○	○	○	○		○		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○		○											○		
高遠町藤沢御堂垣外																																																																																			
高遠町上山田引持																																																																																				
南箕輪村神子柴櫓田		○														○			○	○	○				○									○					○			○							○	○								○					○						○					○	○									
南箕輪村1992		○																																																○																																	2500	
中野市田麦	1	3264	106					1	1		1		2	40	140	322		288	500	470	695	804	392		629	1541	124	487	3813	247	100	354	439	595	96	2712			3828	2652	1232		1	1	759		1141	1	475	1383	122	5	5	51	5	168		63	71	48	21	139	4		49	1	9	27	14	1	25	32	1	4								7		
中野市岩船　西条境 西条境389 西条境400		30	1												3	3			3	2		2	8		5	17	2	3	9	4		2	8	4	1	24		29	21	8	8			2	2		22		8	7				1		2			2	2		28					1	2																
中野市竹原十二木331		243	13												7	9		8	15	32	31	84	5		43	84	18	42	260	15	3	11	25	37	1	197		249	174	59	59				28		77		33	72	12	1		5	1	11		12	11	2		8	2		3	2		3	4		12	1	3	28	377	1	8	1	1	1			14	
中野市三好町																																																																																				
長野市松代東寺尾		135	4								1			1	2	11		10	31	18	29		49		24	47	2	27	141	9	9	9	27	19	4	101			141	101							59		11	58	7			2		5				4	1	4			3	1	1	1			2	2										1		
須坂市小河原																																																																																					
上田市塩尻字上塩尻26		150													4	24		26	15	19	38	24	11	32		63		7	139		1	5	21	14	3	63			125	710	30				5		22		26	68	6			4		4		7	7	2		6			3			3	1		1	2												
丸子町大字西内																									1				5	1		1				1			2	2							2																																					
木島平村穂高稲荷境3286		○	○													○																																		○																																		
穂高町有明6208		712	13													73		20	93	175	240	269	79	112	184	288	10	74	1178	90		40	121	59		750			1217	802	358				42	161			108	290				4		5																		825	2670			32					190	
南相木村日影1268																																																																																						
軽井沢町発地上郷1614																																																																																					
上郷町飯沼2980-2小字大手畑		404	9												1	27		24	41	54	71	167	49		131	171	1	76	426	22		32	58	88		472			526	373	146				27		113		79	173	21			15	5	12			3			11					4		4			4		64	407	1	9						192	1

数字は枚数を示す。
○印は出土古銭を示す。

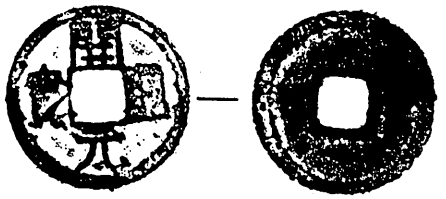
わが国の鋳造貨幣は、奈良時代和銅元年（708年）の「和同開珎」を最初として14種の金・銀・銅銭が王朝時代に鋳造されたが、銅銭の12種を「皇朝12銭」と呼んでいる。村上天皇の天徳2年(958)まで凡そ250年間鋳造されたが、銅材が不足してその鋳造は中止された。その後わが国では中世・近世を通じて各種の貨幣が鋳造されたが、江戸初期寛文10年（1670)寛永銭以外の流通禁止令が出されるまで、この種渡来銭も使用されていた。

なお全域からの出土遺物は極めて少なかったが、土石流の時期決定資料を願って、最後にコミュニティー広場に沿って西寄りに東西の試掘溝を入れて調査を進めた。すると地表下凡そ1.2メートルの土石流の下部砂礫中より土師器、灰釉陶器の破片を発見することができた。これによってローム層上部の表層を流れた土石流の時期は、概ね古墳時代から平安頃までの一時期ではなかったかと推定することができた。

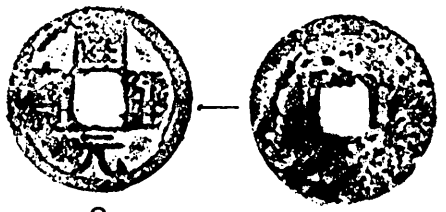
1．出土遺物

矢高原遺跡の出土遺物は、第3図より第12図に示すものがそれである。第3図No.1～No.4まで開元通宝No.5乾元重宝、No.6太平通宝、No.7淳化元宝、No.8至道元宝、No.9景徳元宝、No.10～No.12祥符元宝、第4図No.13天禧通宝、No.14～No.18天聖元宝、No.19景徳元宝、No.20～No.21明道元宝、No.22～No.24景祐元宝、第5図No.25景祐元宝、No.26嘉祐通宝、No.27～No.36皇宋通宝、第6図No.37皇宋通宝、No.38嘉祐元宝、No.39治平元宝、No.40～45熙寧元宝、No.46～No.48元豊通宝、第7図No.49～No.59紹聖元宝、No.60元符通宝、第8図No.61～No.62元符通宝、No.63～No.67聖宋通宝、No.68～No.72政和通宝、第9図No.73～No.75政和通宝、No.76正隆元宝、No.77～No.80淳熙元宝、No.81嘉泰通宝、No.82皇宋元宝、No.83寛永通宝、No.84と第10図No.85～No.96及び第11図No.97～No.98は不明銭である。総点数97枚の出土である。第11図No.99は縄文時代後期の所産と考えられる土製丸玉であり同図No.100は刀の　　部である。同図No.101は灰釉の片口小鉢であり中世陶器と思われる。その他図示してないが近世陶器類の小片多数が出土している。

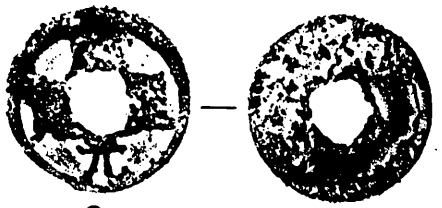
第12図1に示す土器は、調査区東側より出土したもので弥生後期中島式期の壷形土器である。同図2は弥生時代の有肩扇状形石器であり刃部にロー状の付着物が認められる。同図3は打製石斧であり刃部を欠損するものである。いずれも褐色土中からの出土である。



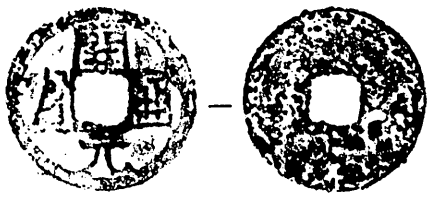
1



2

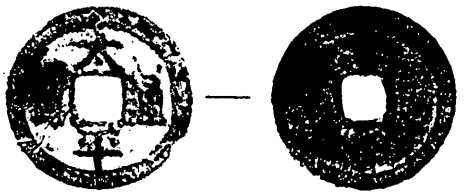


3

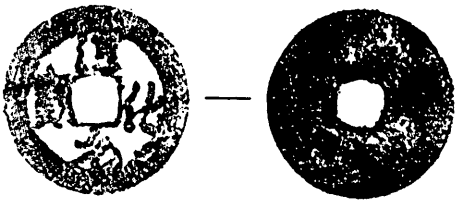


4 開 元 通 宝

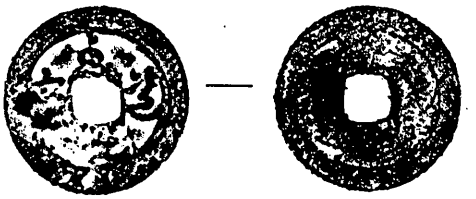
5 乾 元 重 宝



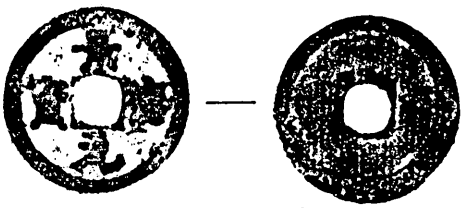
6 太 平 通 宝



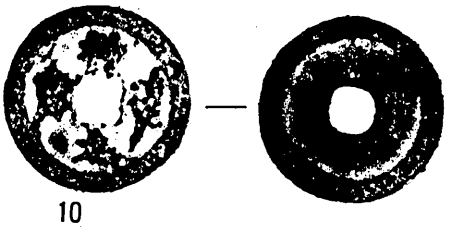
7 淳 化 元 宝



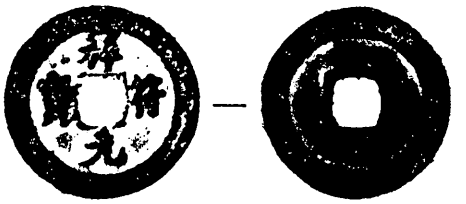
8 至 道 元 宝



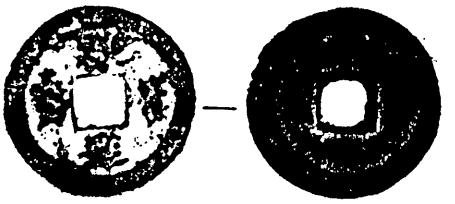
9 景 徳 元 宝



10

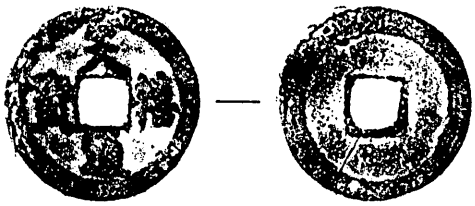


11

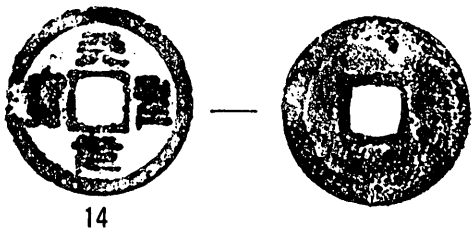


12 祥 符 元 宝

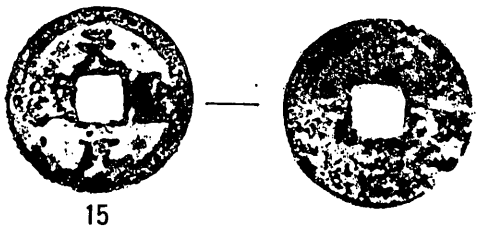
第３図　矢高原遺跡出土古銭拓影



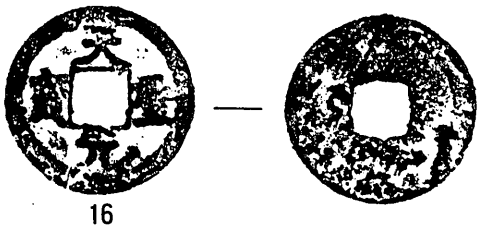
13 天 禧 通 宝



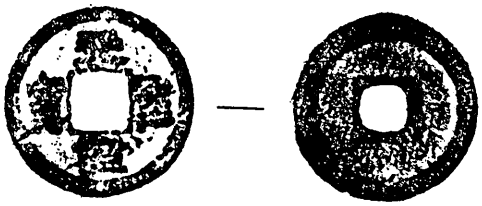
14



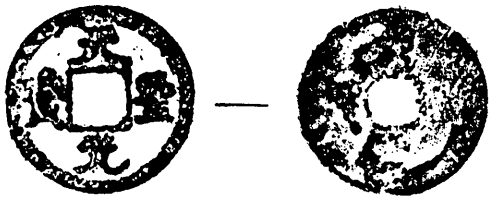
15



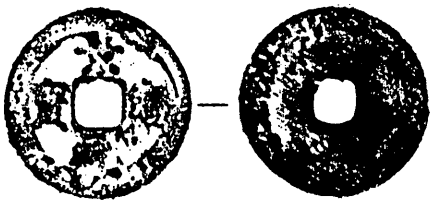
16



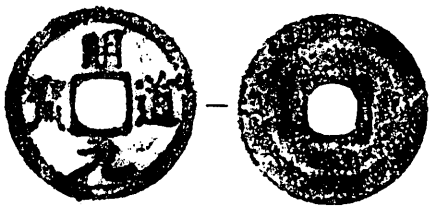
17



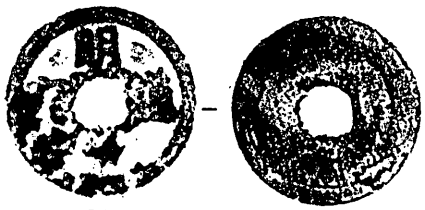
18 天 聖 元 宝



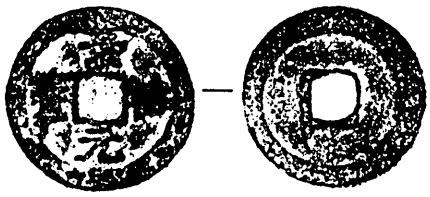
19 景 徳 元 宝



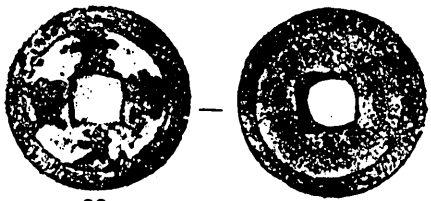
20



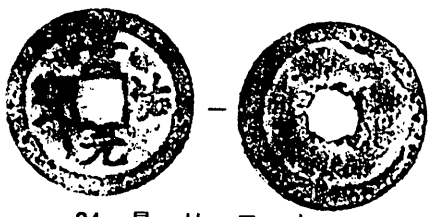
21 明 道 元 宝



22

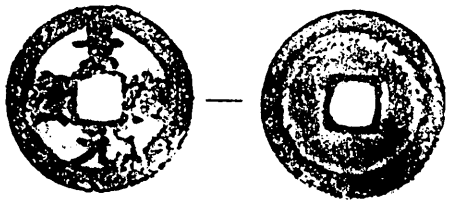


23



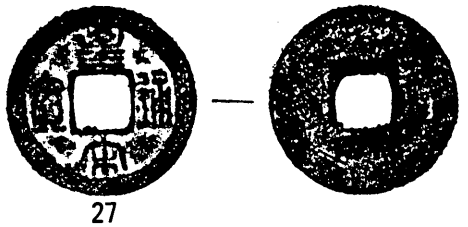
24 景 祐 元 宝

第４図　矢高原遺跡出土古銭拓影

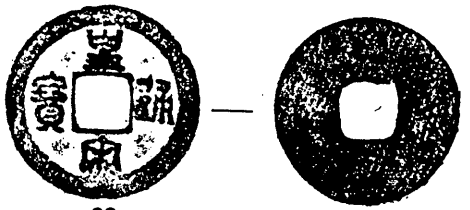


25 景 祐 元 宝

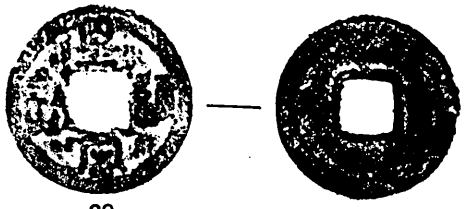
26 嘉 祐 通 宝



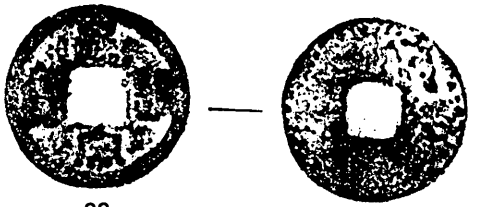
27



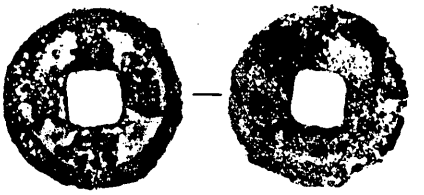
28



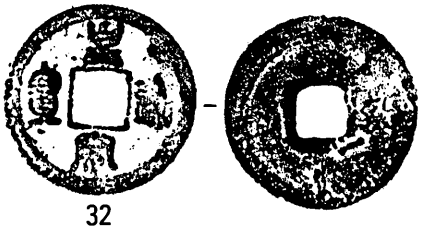
29



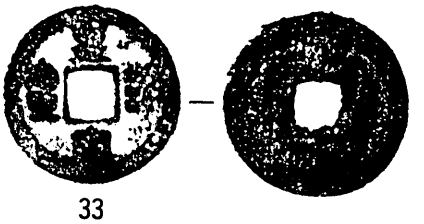
30



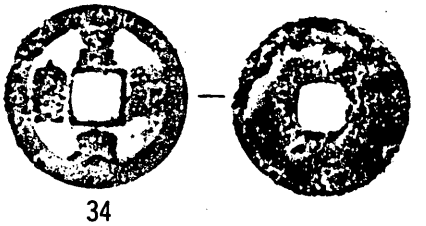
31



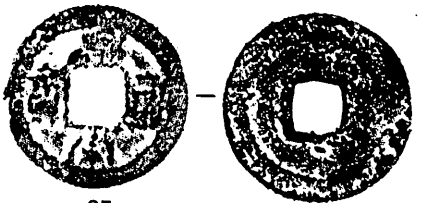
32



33



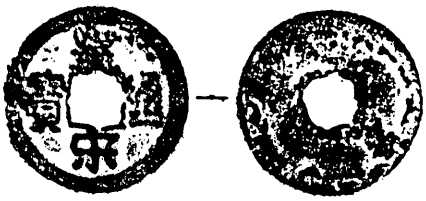
34



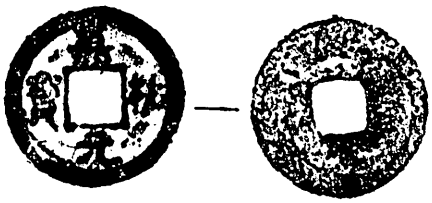
35

36 皇 宋 通 宝

第５図　矢高原遺跡出土古銭拓影

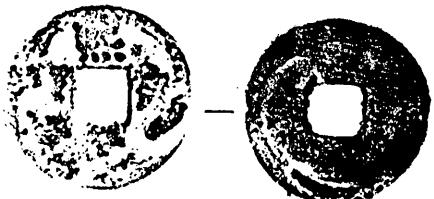


37 皇 宋 通 宝

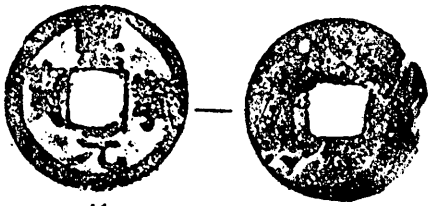


38 嘉 祐 元 宝

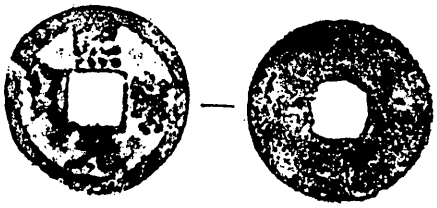
39 治 平 元 宝



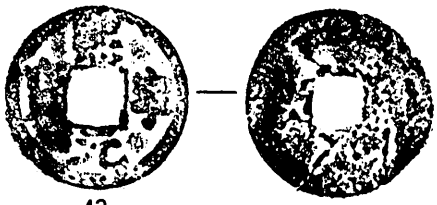
40



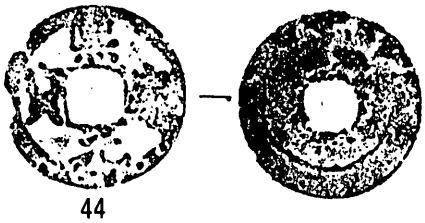
41



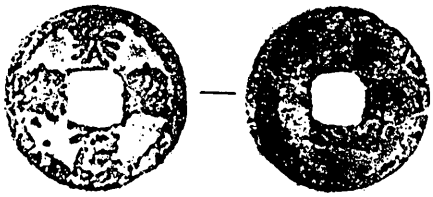
42



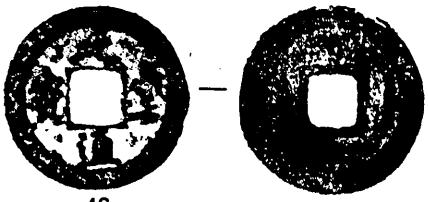
43



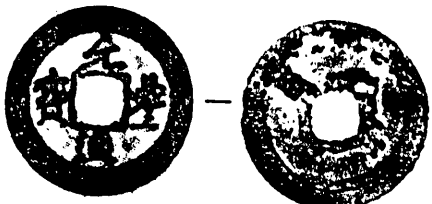
44



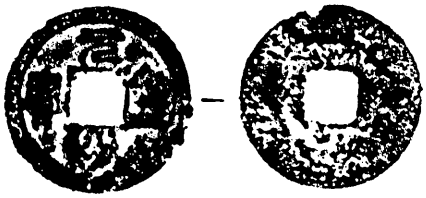
45 熙 寧 元 宝



46

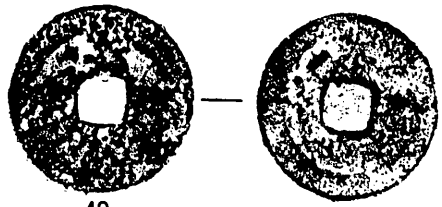


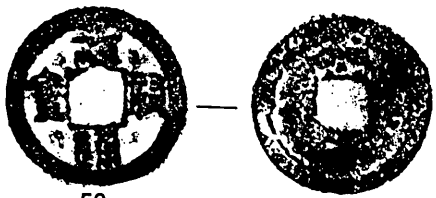
47

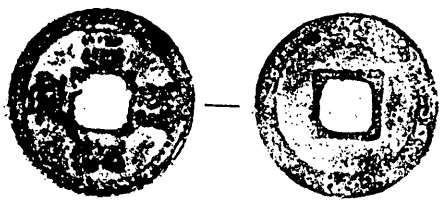


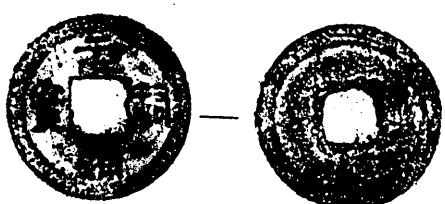
48 元 豊 通 宝

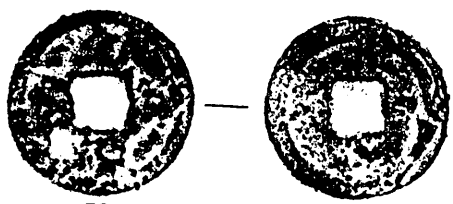
第６図　矢高原遺跡出土古銭拓影

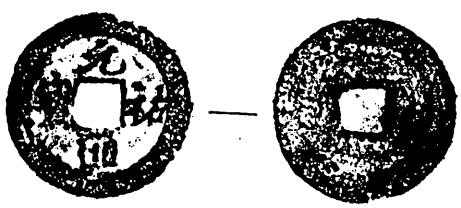

49

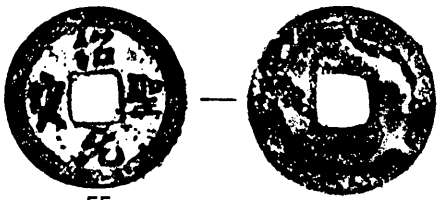

50

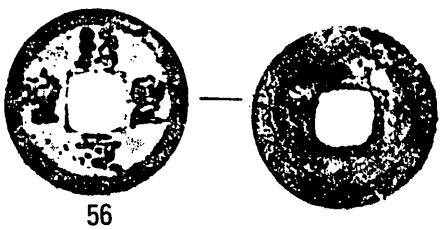

51

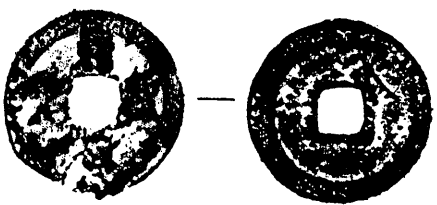

52

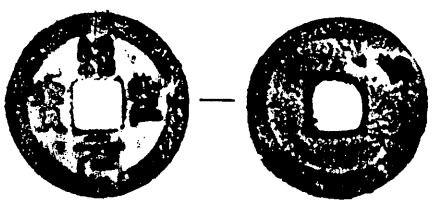

53

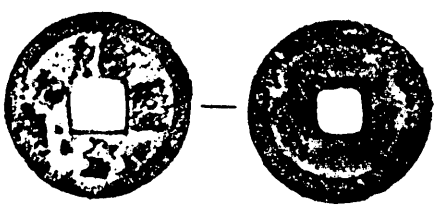

54

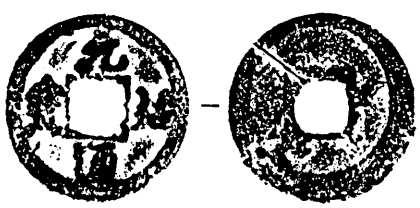

55


56

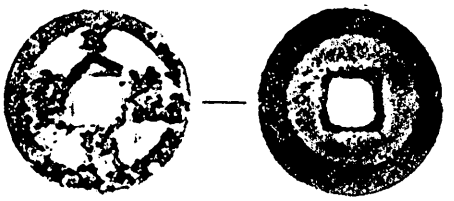

57


58

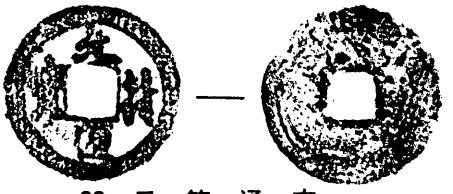

59 紹 聖 元 宝


60 元 符 通 宝

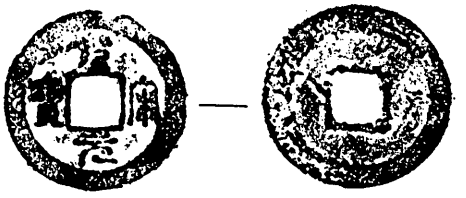
第７図　矢高原遺跡出土古銭拓影



61

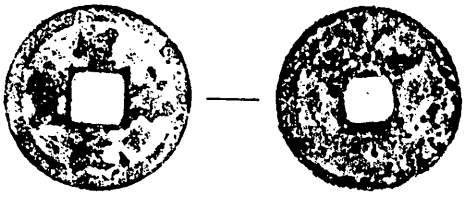


62 元 符 通 宝

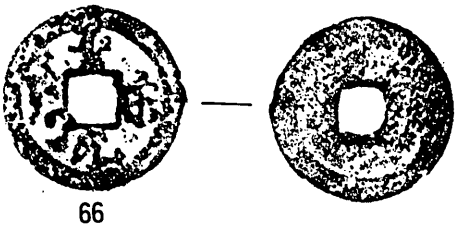


63

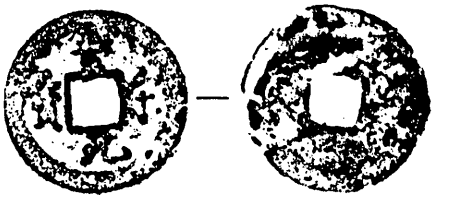
64



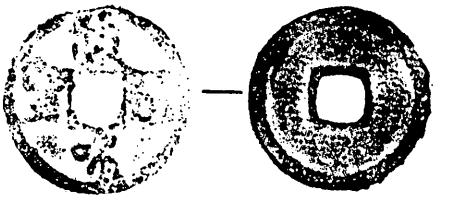
65



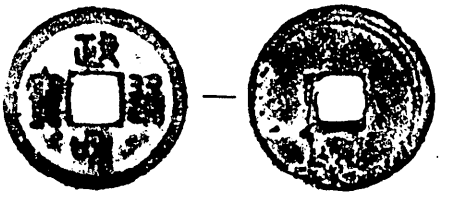
66



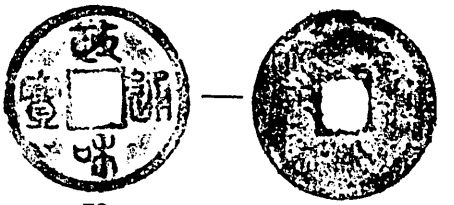
67 聖 宋 通 宝



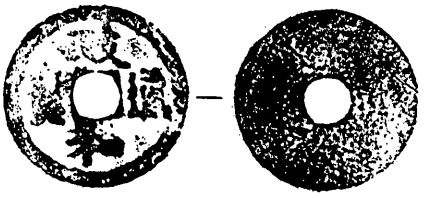
68



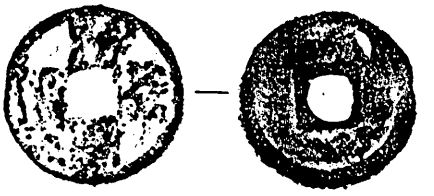
69



70



71



72 政 和 通 宝

第８図　矢高原遺跡出土古銭拓影

73

74

75 政 和 通 宝

76 正 隆 元 宝

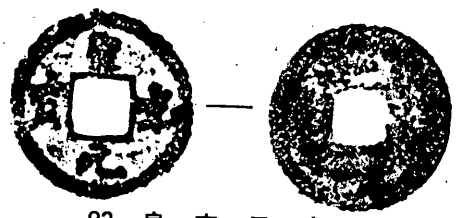
77

78

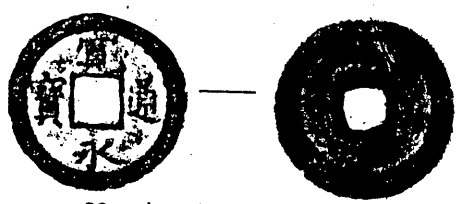
79

80 淳 熙 元 宝

81 嘉 泰 通 宝



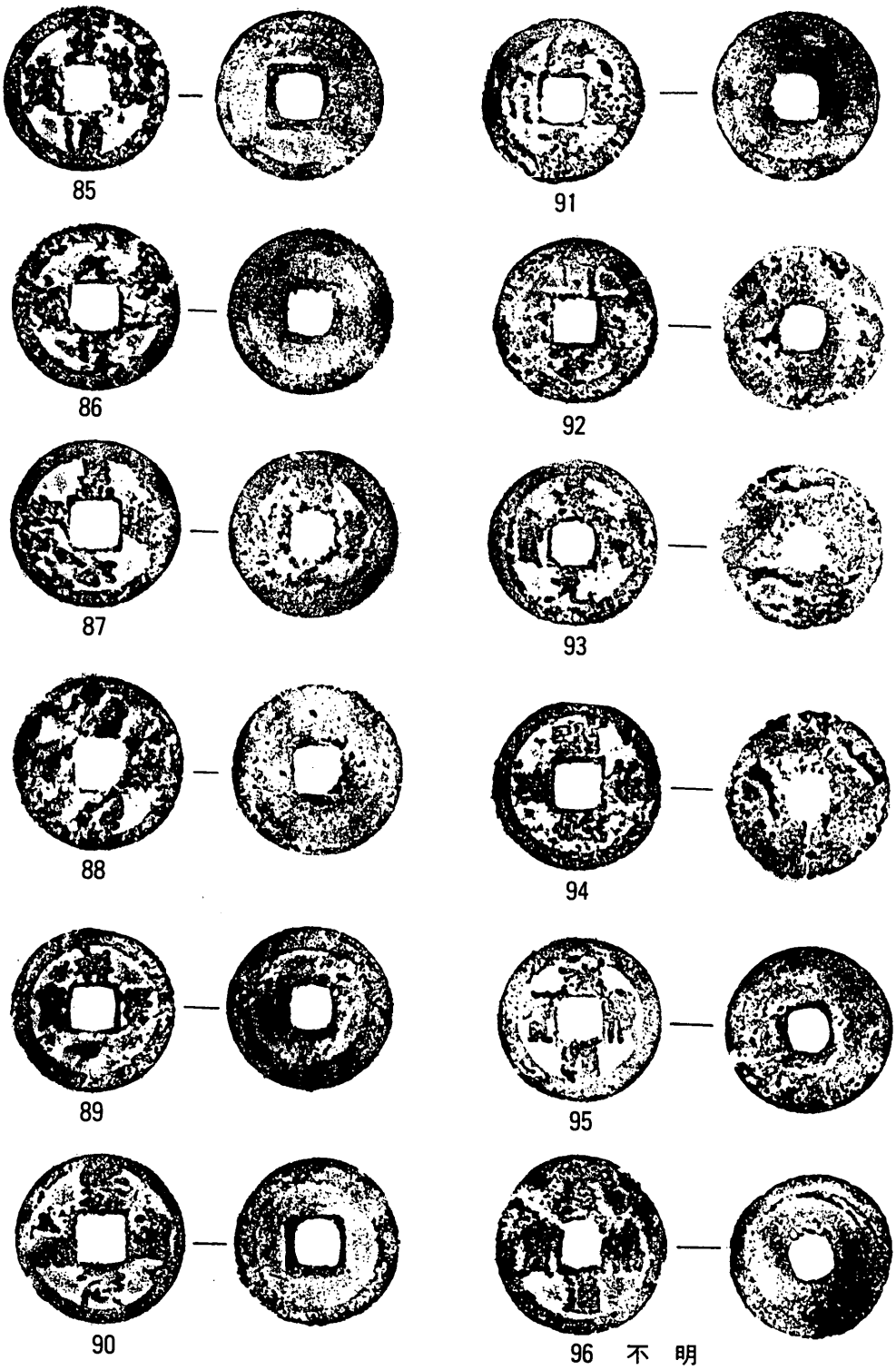
82 皇 宋 元 宝



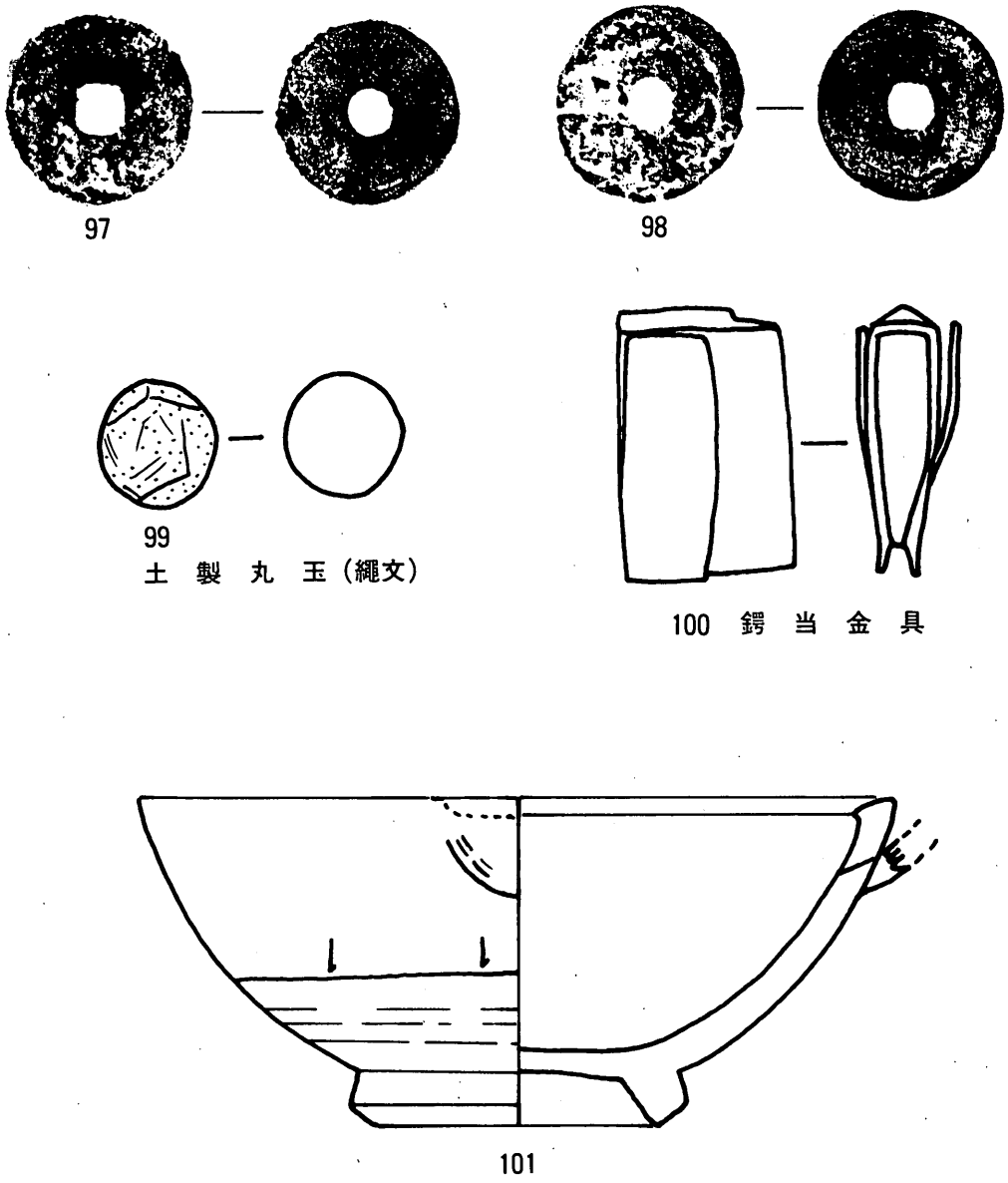
83 寛 永 通 宝

84 不 明

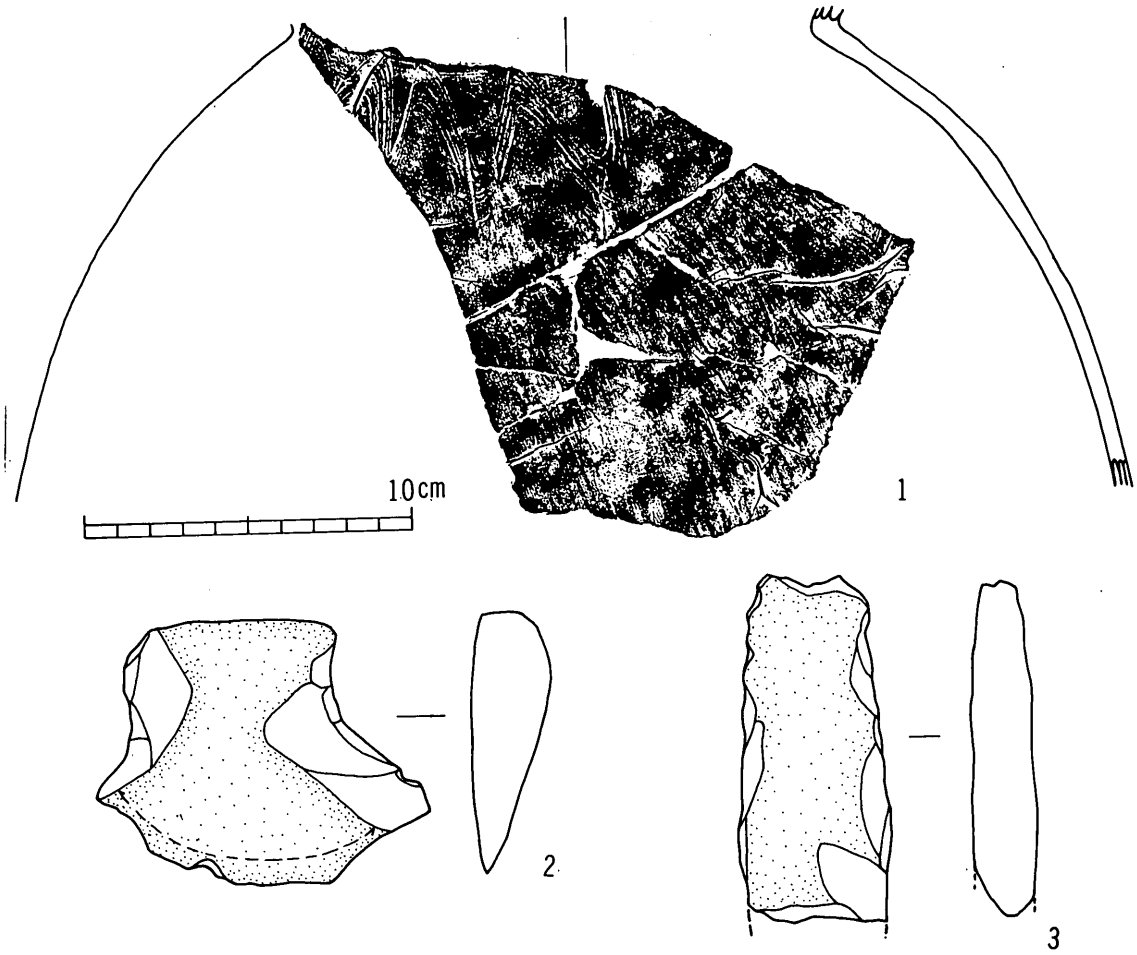
第９図　矢高原遺跡出土古銭拓影



第10図　矢高原遺跡出土古銭拓影



第11図　矢高原遺跡出土古銭・土製品・鉄製品・土器



第12図　矢高原遺跡出土土器、石器実測図

A・B矢高原、C八幡原遺跡 1／2,500

第II章　八幡原遺跡

第1節　発掘調査の経過

遺跡は長野県下伊那郡鼎町大字稲井にあって、矢高中央公園の南方飯田長姫高校の南一段上位の段丘（伊那谷段丘編年…第5段丘）にあって、東には南アルプス連峰や天竜川の清流を望み得る景勝の地である。

一帯は名古熊矢高原と呼ばれ、広い範囲に遺物が包含され「八幡原遺跡」の名で知られている。調査の行われた場所はその一部で、稲井2555番地から2675番地まで、総面積6947平方メートルの区域であった。町では昭和57年度事業として、ここに町営の墓地霊園建設計画を決め、用地関係の具体化に伴い、遺構の有無を明らかにするため造成に先立ち、鼎町教育委員会によって発掘調査が行われた。遺跡付近の環境については、矢高原遺跡に準ずるので消略する。

調査日誌（八幡原遺跡）

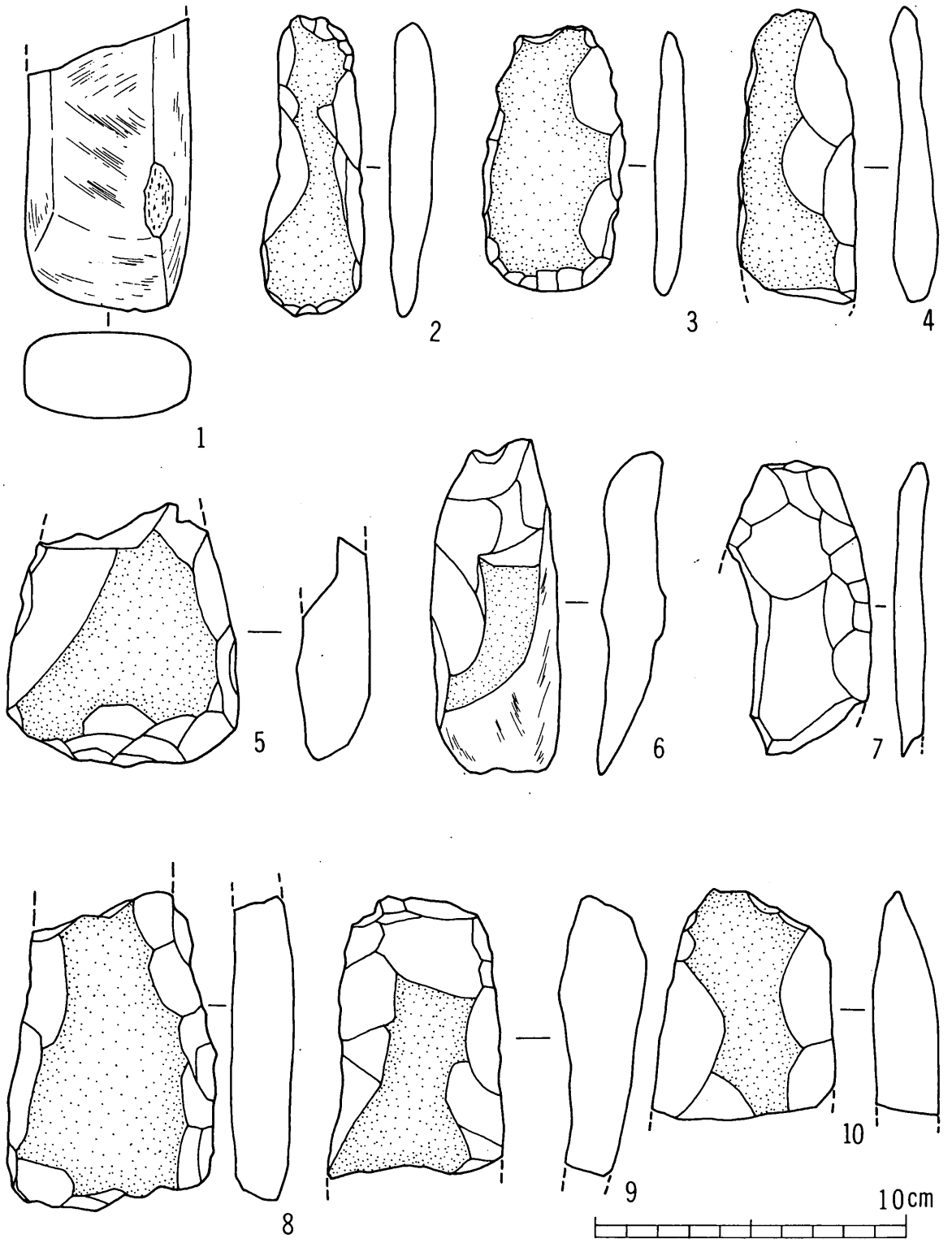
月	日	曜日	天候	日　　誌
10	12	火	晴	器材置場設定、器材運搬、上物排除焼却作業、グリット設定、飲料水運搬、テント張り　作業員（13名）
	13	水	〃	上物排除、グリット杭打作業、県文化課バイパス路線(鼎地区)遺跡確認調査で立寄、案内　作業員（14名）
	14	木	〃	グリット調査、上物排除、町会議員・役場職員現地視察　作業員（13名）
	15	金	〃	グリット(ヌ)―クより南へトレンチ(A)30m×2m設定試掘　作業員（14名）
	16	土	〃 強風	トレンチ(A)に平行にトレンチ(B)設定試掘、グリット(ホ)―18土師・縄文土器片周辺拡張 グリト(ル)―21より西へトレンチ(10m×2m)調査　作業員（15名）
	18	月	〃	各グリット調査、矢高清掃社屋脇弓道場(射場)敷地トレンチ調査、北側段丘崖落ち込み調査　作業員（11名）
	19	火	曇 のち雨	北側傾斜地調査、溝状遺構か？降雨作業午後中止　作業員（14名）
	20	水	晴	同上調査清掃、写真撮影　作業員（12名）
	21	木	〃	西側堺界付近調査、砂礫層段丘崖頭で発見、グリット(ヌ)―25縄文・土師破片付近調査 作業員（14.5名）
	22	金	〃	グリット調査(西側)、午後杭抜、テント撤収器材点検返却、現地打上げ式 作業員（15名）

調査は昭和57年10月12日から同月30日までの予定で実施した。調査区域の北半分は、かつて避病院のあった場所、その後耕地化された気配はあるが篠竹で雑木が全面に生い繁り、荒地化がかなり進んでいた。南半分は北側程ではないが雑草に覆われ、これを除いてグリット設置までには間接的労力をかなり要した。南半は僅かな勾配が南端農道辺まで、これを越えたあたりから上昇する。この部分は土盛整地されるので、一応調査対象からはずし北半に主力を置いた。基準線をこの区域の東側農道沿い（南北）に、北側は段丘崖上の道路沿い（東西）に定め２ｍ×２ｍのグリットを設定して調査の鍬を入れた。グリットによる遺構検出作業は、竹根の排除に悩まされ作業能率を極度に落した。表土は全般に薄く20センチ前後で地山に達した。グリット調査では遺構の確認はできず、僅かに石斧が所を定めず発見されたに過ぎなかった。北半西寄り地点で落ち込みがあり、縄文後期土器破片、石器若干が検出され、周辺を拡大精査したが遺構確認は困難であった。

南側の土盛区域も念のため30ｍ×２ｍの試掘溝２本を穿つて吟味したが遺構はなく、南端農道付近の深い褐色土層から磨製石斧１点の外は特筆すべきことはなかった。さらに北側段丘崖の緩い勾配にも試掘溝を入れたが、この場合も新しい陶器破片、石斧など得たのみであった。落み込みの黒土を排除すると、ローム層との接触部分はかたく踏み固められた溝状の遺構と思われるものが発見され、それは東西両方向に延びるかに思われた。果してそれが何んであるかは判断し難く、安易な推理は慎しみたいが敢て仮定が許されるなら、段丘崖に接する道路の跡の如きものではなかったとも想像されるのである。

１．遺　　物

八幡原遺跡より出土した遺物類は、第13図に示す石器類の他、縄文後期土器小片若干があるのみでその出土量はきわめて少ない。第13図に示す石斧は、同図１が磨製石斧基部欠損のものであり、同図２～10までは打製石斧類で欠損品が多い。土器片は褐色土層中より発見されたものであるが、きわめて小破片であるため図示してない。



第13図　八幡原遺跡出土石器実測図

2．考　　察

以上述べたように矢高原、八幡原両遺跡の発掘調査により土石流跡、古銭及び溝状遺構かと思われるものの一部が検出されたにすぎなかった。いづれも地勢的には段丘崖に近接した場所であり、竪穴住居の発見はできなかった。遺物についても極めて少量で、石器類が点々と出土する程度に止まった。両地域とも遺物の分布状態から居住地域ではなく、それに近接した行動の範囲と判断せざるを得なかった。

矢高原調査区域は、猿小場遺跡と同一面でしかもそれに接している。猿小場調査の報告では、発見された遺構は縄文乃至中世までと幅広い。しかし鼎地籍では遺構の発見はされなかったとしている。恐らく居住地域がこのあたりで終るのではあるまいか。本調査では猿小場との関連を期待したが、それも小地域であり、東南側は既に道路敷となって調査は不可能であった。矢高原西端に近い弓道場建設地をトレンチ調査をしたが、黒土が2メートル以上も落ち込み湿地であることが確認された。したがって窪地であり居住地域の西端がこの付近で尽きるものと推定された。

両遺跡で先史の遺構は見当らなかったが、矢高原において古銭の出土と土石流の中に挾まれた遺物によって、その時期を凡そ位置付けることができたこは本調査の収穫であった。驚く程の巨石を含む土石流の威力がいかに大きいものか、最近しばしば襲う集中豪雨による各地の惨状を見るにつけ、思い半に過ぎるものがある。一般に段丘の表層にこうした変化のあることは他の段丘においても同様である。思うに当鼎町は、古代東山道の道筋でもあり、松川の渡川は必然である。近年農村の近代化に伴なう土地の開発が行われ、多くの遺跡が発見される機会が多い。東山道ゆかりの遺跡にも充分留意して行きたい。

今次調査にあたり、教育委員会の方々をはじめ関係諸機関の御協力を得られたこと、また調査の実際にあたって下さった地元作業員の方々、鼎中学校有志の生徒諸君の作業協力奉仕、ことに地質について緑ケ丘中学校教諭松島信幸氏の御教示など心から謝意を表するとともに、地元の皆さんが埋蔵文化財に対して寄せられた関心にも併せて謝意を表したい。

鼎町矢高原及び八幡原遺跡発掘調査組織

1. 発掘調査委員会

福沢忠治	鼎町教育委員長
関口安穂	鼎町教育長
北原和子	鼎町教育委員
伊藤晋	〃
吉川純長	〃
山口昭治	〃

2. 調査団

団長	遮那藤麻呂	（日本考古学協会員）
調査員	遮那真周	（鼎町文化財審議会委員）

作業協力員

（矢高原遺跡）

片桐久滋	和田彦九郎	加藤好美
村沢鉞子	森本栄三	森田たみ
梶野さかえ	清水守	久保田浩司
松野節子	伊藤和宏（中学生）	関島信保（中学生）
野村和也（中学生）		

（八幡原遺跡）

片桐久滋	松野栄	松原武一
関口将之	林孝彦	伊藤郎甫
伊藤武市	三ッ石巌	関島久美
森本栄三	沢口文江	伊藤英子
八木みな子	松野節子	北原祐子

3. 事業責任者

加藤文三郎	（鼎町長）
関口安穂	（鼎町教育長）

4. 事務局

増田正夫	（教育次長）
吉沢誠	（社会教育係長）
吉川豊	（主事補）
浅井香子	（書記）

お わ り に

鼎町の矢高中央公園は、昭和48年度から着工し、昭和60年完成を予定し進められている都市計画公園事業で、総事業費５億７千万円が見込まれています。

施設としては、コミュニティーの広場、テニスコート、自由の広場、子供の広場、いこいの広場等が計画されており、昭和56年度までに用地買収の他、コミュニティーの広場、テニスコート２面、駐車場の一部が整備されています。昭和57年度は子供の広場の造成に着手し、遊具、トイレ等の構造物を設置することになりました。

また、町営墓地霊園は、特に当町は飯田市の中心部に隣接し、水利、交通の便が恵まれ、ほぼ全域が可住地であるため、人口は増加の一途をたどり、近年住民の中から墓地を望む声が高まり、大きな住民要望となっています。

町では、こうした現状の中で約１億６千５百万円を見込み昭和57年度中に建設を計画施工することになりました。

この２つの工事現場は、矢高原遺跡、八幡原遺跡の包蔵地及び包蔵近接地となっているため、町教育委員会では緊急にこの埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存に努めることになりました。

今回の調査にあたっては、地形的に平担な所ではありましたが、八幡原遺跡においては、篠竹の群生地で、発掘には大変苦労をしたにもかかわらず、遺跡、遺物も少なく終ることとなりましたが、調査団長の遮那藤麻呂先生、調査員の遮那真周先生が中心となり、作業をしていただいた皆さんとのチームプレーにより、発掘調査が短期間で終える事が出来、報告書が完成したわけで、ここに発掘から整理、印刷等々各方面の関係各位に心からお礼申し上げます。

鼎町教育委員会

矢高原・八幡原遺跡
発掘調査報告書

— 1983・3 —

長野県下伊那郡鼎町教育委員会

印刷　ヨシザワ印刷(有)